

論文

# 描画活動時における幼児の空間利用状況に関する探索的検討

— 一定点観測結果を参照しながら —

An exploratory study of children's use of space during the period of drawing activities: Referring to using the fixed-point observation results

野中 陽一郎 (高知大学教育学部) <sup>1</sup>

岡谷里香 森下英恵 都築郁子 谷脇のぞみ (高知大学教育学部附属幼稚園) <sup>2</sup>

土井原崇浩 野角孝一 (高知大学教育学部) <sup>1</sup> 吉岡一洋 (高知大学地域協働学部) <sup>3</sup>

小松和佳 (高知大学大学院) <sup>4</sup> 玉瀬友美 (高知大学教育学部) <sup>1</sup>

NONAKA Yoichiro<sup>1</sup>, OKATANI Rika<sup>2</sup>, MORISHITA Hanae<sup>2</sup>, TSUZUKI Ikuko<sup>2</sup>, TANIWAKI Nozomi<sup>2</sup>,  
DOIHARA Takahiro<sup>1</sup>, NOZUMI Koichi<sup>1</sup>, YOSHIOKA Kazuhiro<sup>3</sup>, KOMATSU Waka<sup>4</sup> and TAMASE Yumi<sup>1</sup>

*1 Faculty of Education, Kochi University*

*2 Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University*

*3 Faculty of Regional Collaboration, Kochi University*

*4 Graduate School of Integrated Arts and Science, Kochi University*

## ABSTRACT

For the purpose of advancing collaboration between kindergarten teachers and researchers in practice-based research, the aim of this study was to examine children's use of space during the period of drawing activities. In study 1, we examined how four-year-old children use of space during the period of drawing activities. The fixed-point observation every three minutes was conducted in kindergarten class of four-year-old children. As the results, the actual usage of space in each time was clarified. Additionally, this study clarified practical knowledge of kindergarten teachers. In study 2, we examined how three-year-old children use of space during the period of drawing activities. The fixed-point observation every three minutes was conducted in kindergarten class of three-year-old children. As the results, the actual usage of space in each time was clarified. On the basis of the fixed-point observation results of this study and the knowledges acquired by participating in practice of drawing activities, we discussed the collaboration between kindergarten teachers and researchers in practice-based research and the future practice-based research for drawing activities.

## 1. 問題と目的

幼児期における教育は、幼児のその後の発達や学びのあり方に大きな影響を及ぼすと考えられる。幼児は、一般的に保育者の工夫が結実し構成された幼稚園という環境の中で遊びに没頭することや様々な活動を行いながら生活している。しかし、幼稚園という環境においては、幼児が単独で存在しているのではなく、保育者や他の幼児と環境を共有することとなる。無藤（2001）によれば、複数の幼児が協力しながら遊びを展開する共同遊びには、感情の共有や役割分担などにより、遊びによる経験に幅や深さをもたらされ、更にコミュニケーション技能などの発達が促されるとされている。一方、佐川（2016）は、幼稚園4歳児の2クラスの自由遊び時間の中で自発的な制作を始め他の幼児と言葉を交わしながら制作する場面を対象として、週1回の参与観察に基づく1年間の縦断観察を行った結果、学年の開始期においては制作に関するモノを見せる行為を保育者に対して行う比率が高いものの、徐々にその比率は低くなるとともに、学年の最終期においては制作に関するモノを見せる行為を他の幼児に対して行う比率が高くなることを明らかにしている。すなわち、幼児の活動は、幼稚園の環境だけでなく他の幼児や保育者との関係性を通しつつ展開されるものとなるだろう。それでは、幼児期の教育には、何が求められているのだろうか。

現行の幼稚園教育要領によれば、幼児期の子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむようになることが、ねらいの1つとして示されている（文部科学省，2008）。こうしたことを鑑みれば、幼児が幼稚園という環境の中で保育者や他の幼児との関係性を通しながら、どのように自分自身の感じたことや考えを具現化し表現しているのかに着目していく必要がある。表現という文脈に着目するならば、我々は、幼稚園における幼児の描画活動を介した表現の機会を目にすることが多い。花篤・岡田（2009）によれば、日本の保育においては、幼児の創造性育成のために描画や制作などの造形表現が、戦後重視されてきたと指摘されている。すなわち、現状の幼児教育の中で表現に着目する際には、幼児の描画や制作など造形表現に関する研究や保育実践双方の知見を積み上げていくことが有用な取り組みになると考えられる。

描画や制作などの表現を対象とした従来の研究では、描画に注目が集まるとともに、幼児の描画表現の発達段階を心理学的に検討するアプローチ（e.g., 東山・東山，1999）が多くなされてきたと考えられる。山田（2014）は、幼児の描画発達研究を展望し、古典的な描画発達研究には、描いた結果にのみ着目したものが多く、描画時の幼児の描画理解や描画意図といった幼児自身の内的プロセスを十分に検討していないこと、描画発達を個の認知的成熟過程としてしかみなしていないことといった問題点を指摘した

上で、個ではなく対人交渉下という他者の役割を具現化し、従来の描画発達段階、表象の発達や描画意図そして他者理解の発達を整理しつつ包括的に捉えた描画発達段階仮説を提示し、当該仮説を検証していく実証研究の必要性を示している。こうした視点は、研究知見を丹念に展望しつつ、生態学的妥当性の高い研究を計画する上で有用なものとなるとともに、現実の保育場面において幼児の描画表現活動を真に刺激する保育実践を通じた研究の必要性を示す重要な視座になると考えられる。それでは、現実の保育場面を想定した場合、描画等の表現活動に際して保育者はどのような保育実践を行う必要があるのだろうか。

若山（2008）は、4歳児と5歳児を対象に言葉かけをした後、見立て絵を作成する個別実験を行った結果、4歳児と5歳児において、多様な見立て絵を行うことを誘う言葉かけが異なることを明らかにしている。この研究知見は、保育者が、幼児の発達段階を考慮した上で関わっていく必要性を改めて顕在化したものといえるだろう。また、若山（2012）は、見立て描画遊びにおける「創造」を複数のイメージを組み合わせて新たなイメージを作り出す行為と位置づけ、「継承」、「共有」、「創造」の3つの概念から見立て描画遊びの具体的な行為内容を整理しつつ、今後の見立て描画遊びは「創造」を目指すべきこと、幼児が見立て描画遊びを当該の活動をやってみたいと思えるようにパターン認識の知見を踏まえ導入部分を工夫することの重要性を示している。こうした研究は、実際の保育場面でのようなことに留意しながら保育者は導入を行っていくべきかを明瞭に示す知見を提供できるものと考えられる。また、これらの研究知見の重要性は、保育者養成の視点からも見出されている。例えば、島田（2015）は、幼稚園実習及び保育実習の修了した保育系学生を対象に5歳児の造形活動に関する質問紙調査を行い、学生の92.5%が実習中の造形活動<sup>1)</sup>で困ったことが有ると回答し、困っている内容として造形活動時の説明の仕方が上位にあがっていたことを明らかにしている。すなわち、若山（2008）や若山（2012）の見出した知見は、今後の保育実践を支える保育者志望学生の悩みを解決する一助にもなると考えられる。

一方、杉本・成清（2007）は、アクリル絵の具と水性アルキド絵の具という2種類の画材を取り上げ、現役の造形作家という視点から、絵画表現における画材の特色や教材としての可能性を整理した上で、複数の実践事例を報告しながら、教材としての利用法を検討している。こうした取り組みは、幼児の描画活動を実際に計画していく上で保育者の導入手法だけでなく専門家の視点から実際の準備物に寄与する重要な知見を及ぼすものになるだろう。すなわち、現実の保育に関する様々な事象には、多様な専門性を背景に持つ人材が介入することでより充実した幼児教育を形作っていきける可能性が示されたと考えられる。

近年、保育者の専門性向上を目指し、保育実践者と研究者とが連携して実践研究を行うことが、ますます増加している。齋藤・小谷・志村・内村・林（2001）は、保育者が、異なる立場の研究者との交流を通して、保育者自身の日常的になっている出来事や癖に気づき、保育実践における多角的な視点を獲得できると指摘している。また、木原（2003）は、目の前の子どもをどう保育すべきかに追われている保育者の現実性を鑑み、保育者が十分な時間を割いて保育を振り返ることができないことを指摘した上で、大学の研究者がサイコジストとなって実践者と連携し行った実践報告と交流による研修会が、保育課題の整理と省察に有効に寄与することを明らかにしている。このような保育実践者と研究者との連携は、保育者側に問題点の整理だけでなく、保育者の専門性を高める新しい視座を与えることの契機になるものと考えられる。

一方、無藤・森下・齋藤・高濱（2007）は、実践者の専門性向上という利点だけでなく、大学の教員と附属の教員とが対等に研究会の運営を行い、公立幼稚園の関係者や保育の研究者を加えた保育者のための研修を行う組織が、実践者側に自分自身の実践が理論的な枠組みの中にかかに包括されるのかを可視化させ、研究者側に理論的な解説を事例により裏付ける契機を与え、理論と実践現場をつなぐ際の留意点をつかむことができるといった双方への有効性を明らかにしている。また、短期大学と附属幼稚園との年間を通じた連携による取り組みでは、前年度に見いだされた課題を踏まえ、保育者志望の実習生に対してより充実した実習指導を提供できるよう改善を行いつつ、実践報告を行っている（杉原・小島、2010）。これらの研究は、保育実践者と研究者との連携が、保育実践者の専門性向上だけでなく、今後の保育をより充実させていく取り組みに参画できる多様な人材の育成や発展にも利点があることを示唆している。それでは、こうした保育実践者と研究者との連携をより充実させていくためには、どのような取り組みを実施していく必要があるのだろうか。

無藤・岩立・倉持・西坂・森下・青木（2004）は、国立大学附属学校<sup>2</sup>の1つである幼稚園の役割として、大学教育への一層の貢献、大学との連携による研究、実践的資料の作成と提供、外部への研修機会の提供、人材の育成といった5つに整理し、附属学校と大学との研究上の連携における問題点を、連携関係が表面上に終わりやすいこと、附属学校における教員の研究者としての位置づけの弱さ、附属学校との連携による研究が論文としてなりにくく評価される対象になりづらいこと、連携の組織が弱いことと指摘した上で、新たな研修機関を設置し、研修の実践内容及び研修参加者の評価を踏まえた実践報告を行っている。この取り組みは、附属学校と大学との連携上の問題点を可視化し、その問題点を払拭した上で保育に携わる人材に対し

て真に意味のある研修の方向性を指し示すものだと考えられる。一方、無藤（2013）は、発達心理学に関する研究を基軸としながら保育実践に役立つ可能性や実践と研究者との関わりを展望しつつ、実践自体を捉えるために研究者側が実践に触れ、実践に入り込み、実践から学ぶ契機を作り出した上で研究を立ち上げることの必要性を指摘している。この指摘は、研究者が保育実践者と研究を進めていく上で有効な知見になりうるだろう。

これまでの保育実践者と研究者の連携のあり方に関する指摘を鑑み、今後、新しくかつ真に保育現場を刺激する可能性を有する研究の土台となるリサーチクエストンを立案していくためには、研究者が保育実践に実際に触れ、実践に入り込みながら、実践から学ぶことを通して新たなリサーチクエストンを保育実践者と連携して創出していくことが求められる。そこで、本研究では、保育実践者と研究者との連携による実践研究を積み重ねていく端緒として、幼児期の教育で求められている表現に付随する活動である幼児の描画活動に着目することで、探索的に保育実践の中での実際の描画活動を検討し、保育実践に研究者が入り込んだことにより獲得された知見を報告することを目指す。研究者が保育実践に参画する園は、四国地方に所在地を置く国立大学法人教育学部附属幼稚園を対象とした。そのため、本研究では、本報告のためだけの連携という表面上の取り組みにとどまらず、長期的に保育実践者と研究者との連携による実践研究を継続するために今後必要になる視点も併せて検討していくことも求められる。

それでは、実際の保育場面において、幼児はどのような描画活動を行っているのだろうか。先述した若山（2008）の実施した個別実験の研究は、保育者による幼児の年齢差を踏まえた声かけの視点を示す上では有効となるものの、実際の保育場面では、他の幼児の存在も考えられる。すなわち、幼児は、保育者だけでなく他の幼児との関係性を踏まえた上で、幼稚園という環境を活用しながら描画活動を行うことが予測される。そのため、本研究では、幼児が他の幼児と空間を共有でき、描画活動を行える場면을対象とした検討を行う必要があるだろう。また、こうした描画活動場面は、山田（2014）の指摘している個人ではなく生態学的妥当性の高い対人交渉という他者の役割が具現化できる描画活動にも該当し、描画発達を詳細に検討することにも寄与する保育実践と考えることもできる。

なお、本研究では、学びの主体者である幼児自体に焦点を置くことを通して保育実践を捉えなおすこととする。そこで、幼児が他の幼児も存在する描画活動時にどのように空間を利用しているのかについて注目することとする。むしろ、保育実践者や研究者による幼児の好奇心や探求心を育む環境構成あるいは声かけといった保育実践の中での介入方法を検討していくことも重要になると考えられる。

そのため、必要に応じて保育実践者等による保育実践の具体も捉えておく必要があるだろう。

以上の議論を包括し、本研究では、多くの幼児が存在する中で幼児の描画活動を対象として、描画活動時の幼児の空間利用状況を定点観測により探索的な検討を行うことを目的とする。また、研究者が保育実践場面に入り込むことで見出される知見や保育実践者の環境構成あるいは声かけについても適宜結果として報告を行い、今後の保育実践者と研究者の連携による実践研究を継続していく上で必要となる視座についての考察も行う。なお、本研究は、研究者が実際の保育場面に入り込むことで、今後、保育実践者と連携しての実践研究の方向性を形作ることに寄与し、今後の幼児の描画活動の可能性を拡大するだけでなく、将来的には保育者の描画活動における指導や支援の再構築にも繋がるものになると考えられる。

## II. 4歳年中組の描画活動<sup>3)</sup> (研究I)

### 目的

4歳年中組に所属する幼児の通常の子遊び時間を活用し、集団保育として実施した描画活動場面を対象に実践概要を報告すること、描画活動時における幼児の空間利用状況を定点観測により探索的な検討を行うことを目的とする。

### 方法

**協力幼稚園と観察対象者** 協力幼稚園は、四国地方に所在地を置く国立大学法人教育学部附属幼稚園であった。なお、2014年度から3年計画で、園のめざす子ども像である「よく考えて行動する子ども」に沿いながら、教育課程を再編し、新たな指導計画を作成している。具体的な協力幼稚園のプロフィールは、Table 1の通りである。一方、観察対象者は、観察日に協力幼稚園に登園した4歳年中組2クラスに所属する幼児総計36名であった。

**観察期間** 観察は、2016年11月7日月曜日の9時30分から10時15分<sup>4)</sup>までの45分程度であった。

Table 1 協力幼稚園のプロフィール

クラス数	5歳児年長組2クラス 4歳児年中組2クラス 3歳児年少組1クラス
園児数	5歳児41名 4歳児40名 3歳児28名 総計109名
教員数	園長1名 副園長1名 教諭5名 保育補助5名 養護教諭1名 事務関係職員4名
1日の保育の流れ	8:40 登園 身支度 9:00 自由遊び 11:30 クラス活動 12:00 昼食 自由遊び 13:15 帰り支度 集まり 14:00 降園 (水曜日のみ11:30)

**研究上の倫理性** 観察内容の研究使用及びビデオにより録音・録画による音声記録について、協力幼稚園の園長<sup>5)</sup>より許可を受け実施した。

**描画活動時の材料** 7色の絵の具(赤、青、黄、白、茶、緑、紫)をペットボトルに入れて色づくり及び描画活動に使用できるように用意した(Appendix 1)。各絵の具を混色できるカップ、描画活動に活用できる筆などを設置した。

**定点観測エリアと観測方法** 定点観測エリアについては、事前に研究者の1名<sup>6)</sup>が協力幼稚園を訪問し、保育実践者が計画していた当日の描画活動実践の話を聴取し、年中組の保育室付近に設置される描画活動に活用する空間から5つのエリアを設定した。5つのエリアは、丸木小屋<sup>7)</sup>の外側<sup>8)</sup>(1-A)、丸木小屋の内側(1-B)、白いモニュメント(1-C)<sup>9)</sup>、ブルーシート上に広げた大きな白い和紙(1-D)、色づくりエリア(1-E)であった。各エリアの全体見取り図は、Figure 1<sup>10)</sup>に示した。

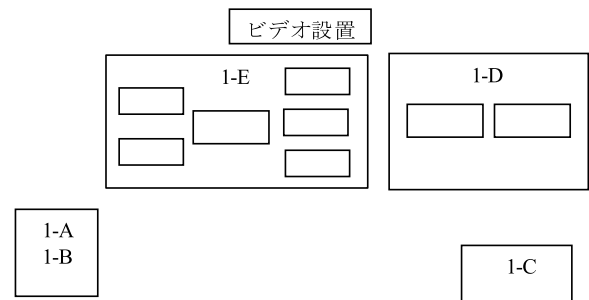


Figure 1 各エリアの全体見取り図

また、丸木小屋や白いモニュメント、そして色づくりエリアに関しては、写真画像をAppendix 2~4に示した。

観測方法については、定点観測実施者でもある第一著者が、幼児の描画活動が開始したと判断した後、幼児の位置する各エリアの人数や活動上の気づきを、3分毎に、各エリアを示す1枚の全体見取り図上に記録を行った。

**実践における保育実践者と研究者の位置づけ** 当該の保育実践活動には、観察対象者の担任2名が保育実践者として活動を推進するだけでなく、大学で美術教育に携わる3名の研究者<sup>11)</sup>が色のスペシャリストとして保育実践に参画した。また、2名の研究者は観察や定点観測に重きを置きながら、必要に応じて活動に参加する形で保育実践<sup>12)</sup>に協力した。

### 結果と考察

**実践概要報告** 研究者総計5名は、描画活動実践に際し、当該日の登園時間1時間前から描画活動エリアの準備活動に参画した。保育実践者は、準備活動の中で描画活動実践に向け、白いモニュメントに顔を描く工夫を行っていた(Appendix 5)。

その後、観察対象者の登園が終わり、各保育室での活動を終えた後、描画活動エリアに揃って移動してきた。保育



実践者は、全員が座位姿勢で話を聞ける体制を形作りながら、活動の説明を以下のように始めた。『今日は、みんなここに何をしに来ましたか。そうです。みんなのことを絵の具が待っていていたよ。今日はねえ、みんな上着を着たりして寒くなってきてでしょう。でねえ、実はねえ、あそこに白いなんか、にこっと笑っているお山が見えますか？でもねえ、あの白いお山ちゃんもねえ、寒いよおー、何かお洋服欲しいよって言っています。いいこと言う。それから見てください。この木の小屋。木の小屋もねえ、何にも着ていないからねえ。頭にはコケが生えているからねえ、頭に毛が生えてきたけどねえ、この下はね、寒いーって言っています。床暖房も作ってあげたいところですが。今日はですね、皆と一緒に好きな色を作って遊びたいと思います。でえ、〇〇先生<sup>13)</sup>はピンク色が大好きなんよ。』<sup>14)</sup>といった説明から開始し、色づくりの説明をする中で色づくりに困ったらこの人たちに尋ねようという流れを保育実践者が形作り、色のスペシャリストの紹介と各研究者から幼児に対する挨拶が行われた。その後、好きな色ができたら、木の小屋に色を塗ったり絵を描きましょう、また「寒い」って言っているお山にも好きな色を塗ったり絵を描いてお洋服を着せてあげましょうといったような説明がなされた。また、持って帰りたいあるいは紙に描きたい場合は、こっちにも描けるとブルーシート上の和紙の説明も行われ、自分の好きな色を作って、好きな色で好きなものを描こうという実践が開始した。その後、中学生が来園し、次の活動に移る段階に全体での実践が終了した。

保育実践者は、当該の実践において、説明の際に寒くなってきた季節感を踏まえ、幼児に寒がっている人を想起しやすいよう、準備段階で白いモニュメントに顔を描いていた。そして、白いモニュメントが絵の具を塗ったり絵を描

いたりするものであることを幼児にまず説明し、次に丸木小屋を説明するといったように準備段階や説明の順番に留意していることが考えられた。また、保育実践者は、研究者を紹介する際、色のスペシャリストという文言を使い、幼児に困った際の援助をしてくれる支援者であることを認識させる巧みな紹介を行っていた。

**定点観測** 各定点観測時間において、それぞれの描画活動エリアに位置する幼児の傾向を示すため、各定点観測時間における幼児の人数を算出した。その結果は、Figure 2<sup>5)</sup>に示した。

Figure 2の結果からは、大部分の定点観測時間において、色づくりエリアに位置する幼児の人数が最も多いことが示された。このことは、若山(2012)の「創造」に関連する、幼児が色を混ぜて新しい色を形作るという活動に魅力を感じ、熱心に取り組んだことを示唆している。また、新しい色を作り出すという活動が目新しいものだった可能性も考えられる。

丸木小屋の外側と内側では、実人数の多い時間帯の割合において内側が多いことが示された。なお、丸木小屋の外側は同一エリア内で33分時点が最も大人数であり、丸木小屋の内側は同一エリア内で12分時点が最も大人数であった。一方、幼児は、丸木小屋の外側の高い部分に色を塗るあるいは絵を描くために、ビール瓶のケース(箱型)を持って来て、ケースを利用している姿が観察された。また、そうした活動をしている幼児を見た他の幼児が、ビール瓶のケースを持ってきて利用する模倣も見られた(Appendix 6)。

白いモニュメントでは、同一エリア内で12分時点が最も大人数であった。21分時点からは、筆を使って色を塗り、絵を描くだけでなく、混色に使用したカップを持ってきて、絵の具をモニュメントに投げかける幼児の姿も見られた。

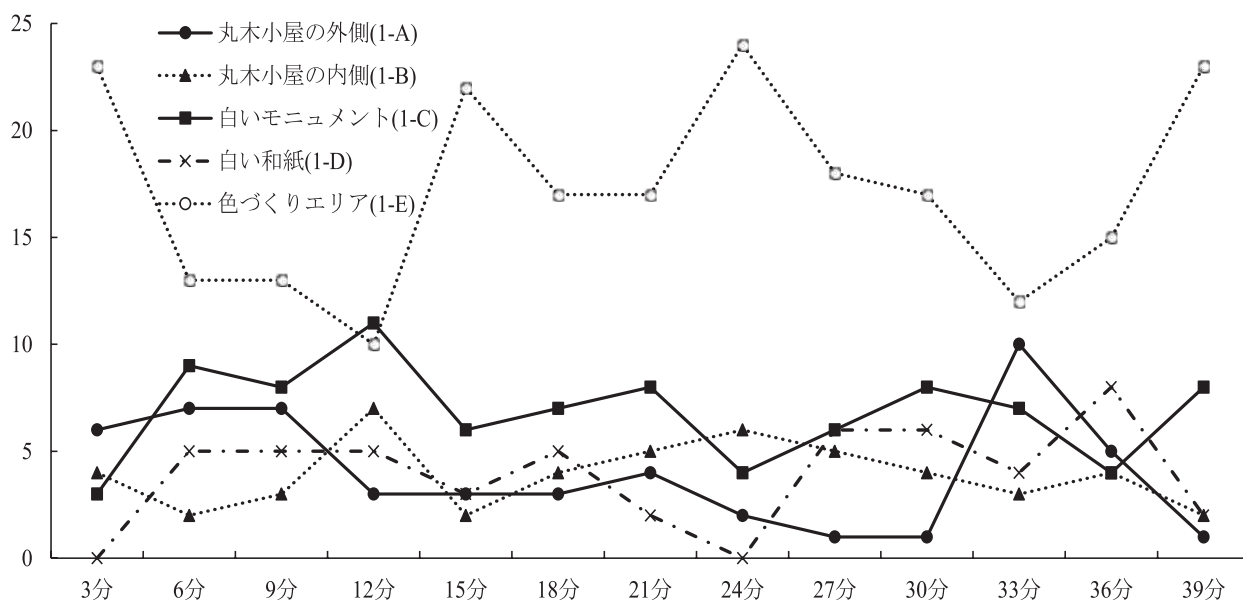


Figure 2 各定点観測時間における5つの描画活動エリアに位置する幼児の人数プロフィール

白い和紙は、同一エリア内で36分時点が最も大人数であった。また、持ち帰りたいあるいは紙に描きたいという説明であったため、1枚の和紙に1人が絵を描くことが中心であった。そのため、各幼児が、どのような描画意図から描いたのかを検討していく必要性が考えられる。なお、この1人1人が1枚の和紙に描いた作品は、他の幼児も周囲にいる環境の中で表現されたものであるため、対人交渉下の視点を踏まえ描画表現の発達の枠組みから検討すること、森・齋藤（2013）の実施したように幼児の描いた絵の画像解析から色彩情報量と形態情報量を算出し、形態表現の豊かさを検討することも可能となるかもしれない。

定点観測を終えた後ではあるが、6人の幼児が色づくりエリアにおいて自分の手に絵の具をつけ、「ゾンビだぞおー」といった遊びを行っていた。このように、幼児にとつては、描画活動を契機に新しい「ごっこ遊び」を生み出す可能性も示された。

今後は、エリア人数の観測だけではなく、丸木小屋の外側の27, 30, 39分に観測された1人の幼児のように、当該の幼児がどのような意図に基づき描画活動を行っているのかを詳細に検討していくことも必要になるだろう。

以上のように、研究Ⅰでは、描画活動時における幼児の空間利用状況を定点観測により探索的に明らかにすることともに、集団保育として実施した描画活動場면을対象に美術を専門とする研究者等が保育実践に携わった実践概要を報告することができた。

### Ⅲ. 3歳年少組の描画活動<sup>16)</sup>（研究Ⅱ）

#### 目的

3歳年少組に所属する幼児の通常の自由遊び時間を活用し、登園して描画活動を希望した幼児を対象に、描画活動時における幼児の空間利用状況を定点観測により探索的な検討を行うことを目的とする。

#### 方法

**協力幼稚園と観察対象者** 協力幼稚園は、研究Ⅰと同一であった。一方、観察対象者は、観察日に協力幼稚園に登園した3歳年少組に所属する幼児総計28名の中から、希望して描画活動に参加した幼児であった。

**観察期間** 観察は、2016年11月9日水曜日の8時40分から10時<sup>17)</sup>までの80分程度であった。

**研究上の倫理性** 研究Ⅰと同様に観察内容の研究使用及びビデオにより録音・録画による音声記録について、協力幼稚園の園長より許可を受け実施した。

**描画活動時の材料** 研究Ⅰと同様に、7色の絵の具（赤、青、黄、白、茶、緑、紫）をペットボトルに入れて色づくり及び描画活動に使用できるように用意するとともに、色を単色でも活用できるようにペットボトル以外の入れ物にも絵の具を入れた準備が行われた。各絵の具を混色あるい

は絵の具を入れることができるカップ、描画活動に活用できる筆などを設置した。

**定点観測エリアと観測方法** 定点観測エリアについては、年少組の保育室付近に設置される描画活動に活用する空間から3つのエリアを設定した。3つのエリアは、比較的長い和紙が2枚置かれそれぞれの和紙に複数人で絵を描くことが出来る保育室前のエリア（2-A）、年少専用のプール<sup>18)</sup>を活用した壁画エリア（2-B）、比較的小さな和紙が数枚置かれそれぞれの和紙に個人で絵を描くことが出来る図書室前のエリア（2-C）であった。また、各エリアの全体見取り図をFigure 3<sup>19)</sup>に示した。

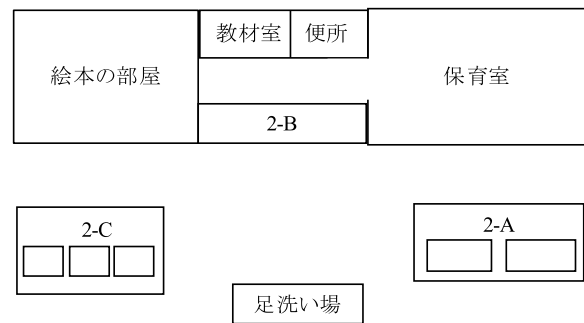


Figure 3 各エリアの全体見取り図

年少用のプールを活用した壁画エリアに関しては、写真画像をAppendix 7に示した。

一方、観測方法については、定点観測実施者でもある第一著者が、幼児の描画活動が開始したと判断した後、幼児の位置する各エリアの人数や活動上の気づきを、3分毎に、各エリアを示す1枚の全体見取り図上に記録を行った。

**実践における保育実践者と研究者の位置づけ** 当該の保育実践活動には、観察対象者の担任1名が保育実践者として活動を推進し、大学で美術教育に携わる3名の研究者及び心理学を専門とする研究者2名の総計5名<sup>20)</sup>も保育実践に参画した。しかし、心理学を専門とする研究者の内1名は、定点観測に重きを置きながら、必要に応じて活動に参加する形で保育実践<sup>21)</sup>に協力した。

**実践手続き** 研究者総計5名は、描画活動実践に際し、当該日の登園時間1時間前から描画活動エリアの準備活動に参画した。その後、保育実践者は、登園して身支度が終わった幼児が、順次希望に応じて描画活動に参加できるよう適切な声かけを行った。なお、描画活動に際して、上履きと靴下を脱ぐよう徹底させていた。その後、幼児が、自分自身の希望に応じたエリアに移動して、描画活動に取り組み始めた。むろん、自由遊びの時間であるため、描画活動以外の活動をしていた幼児も存在した。その後、徐々に幼児が描画活動を終え、手や足を洗う中で、1つのエリアにしか幼児がいなくなった時点で実践が終了した。

#### 結果と考察

各定点観測時間において、それぞれの描画活動エリアに

位置する幼児の傾向を示すため、各定点観測時間における幼児の人数を算出した。その結果は、Figure 4<sup>22)</sup>に示した。

Figure 4の結果からは、開始から15分まで保育室前のエリアに位置する幼児が最も多いことが示された。これは、当該エリアの空間配置が保育室の目の前にあること、最初に描画活動を始めた幼児が当該エリアであったことなどが関連していると考えられる。また、保育室前のエリアでは、45分時点で三輪車のタイヤに絵の具をつけて、幼児が三輪車を漕ぎ、和紙の上にタイヤの跡をつけるような姿も見られた。この活動の契機は、美術を専門とする研究者の1人が三輪車のタイヤに絵の具を塗り、三輪車を和紙の上で動かし、タイヤの跡をつけることを幼児に見せたことによる。こうした保育者の視点を模倣し、幼児は即座に自身の活動に取り入れることが出来たことも示された。そのため、幼児が自身の活動に取り入れることを求める他者の姿や仕掛けを設定することも必要となっていくだろう。

壁画エリアでは、18分以降、1回の観測時間を除き、3つのエリアの中で当該エリアに位置する幼児が最も多いことが示された。これは、当該エリアに配置された和紙に絵を描くという環境構成が、通常の机の上に置かれた画用紙という下を見つめ絵を描くことと異なり、立位姿勢のままの視線に絵を描くこととなったため、幼児に新鮮な印象を与えた可能性が考えられる。また、壁画エリアは、年少専用のプール上に設置されたため、床を汚すことを厭わず、絵の具を好き放題に使うことが出来たことも幼児の関心に寄与したものとなるだろう。また、39分時点においては、保育実践者が自身の手に絵の具を塗り、絵の具のついた手を壁画上の和紙につけて、手形をつけるだけでなく、そのまま下におろし、「ゾンビだぞおー」という声かけとともに周りの幼児にその姿を見せていた。その後、幼児が、

模倣し同様の行動をとる姿も見受けられた。このように保育実践者の活動は、幼児のその後の活動を形作る上で重要なものとなる。

図書室前のエリアは、他の2つのエリアと比較して、幼児の人数が少ない割合が多く見受けられた。しかし、当該エリアは、保育室前のエリアと異なり、それぞれの和紙に個人で絵を描くことが出来るものの、1枚の和紙に1人が絵を描くだけでなく、1枚の和紙を複数の幼児が活用している姿も見受けられた。松井・無藤・門山(2001)は、3歳児と4歳児の自由遊び場面における自然観察を通し、幼児の他の幼児との相互作用のきっかけを明らかにしている。今後は、こうした知見を援用し、各幼児が、1枚の和紙をどのようなことを契機に協同<sup>23)</sup>して他の幼児と使い、絵を描いたのかを検討していく必要性も考えられる。

また、自由遊びの時間であるため、描画活動に参加せず、保育室で遊ぶなどしている幼児の姿も見られた。そのため、今後は、エリア人数の観測だけではなく、各エリアで協同しながら描画活動を行っている幼児の意図や関係性及び幼児間の会話内容を詳細に検討していくことに合わせて、半数以上の幼児が描画活動をする際、その活動を選択しなかった幼児の個人内プロセスや他の幼児との関係性を検討していくことが重要となるだろう。

以上のように、研究Ⅱでは、幼児の通常的自由遊び時間を活用し、登園して描画活動を希望した幼児を対象に研究者も実践に携わりながら、描画活動時の幼児の空間利用状況を定点観測により探索的に明らかにすることができた。

#### IV. 総合的考察

本研究は、保育実践者と研究者との連携による実践研究を積み重ねていく端緒として、保育実践に研究者も入り込

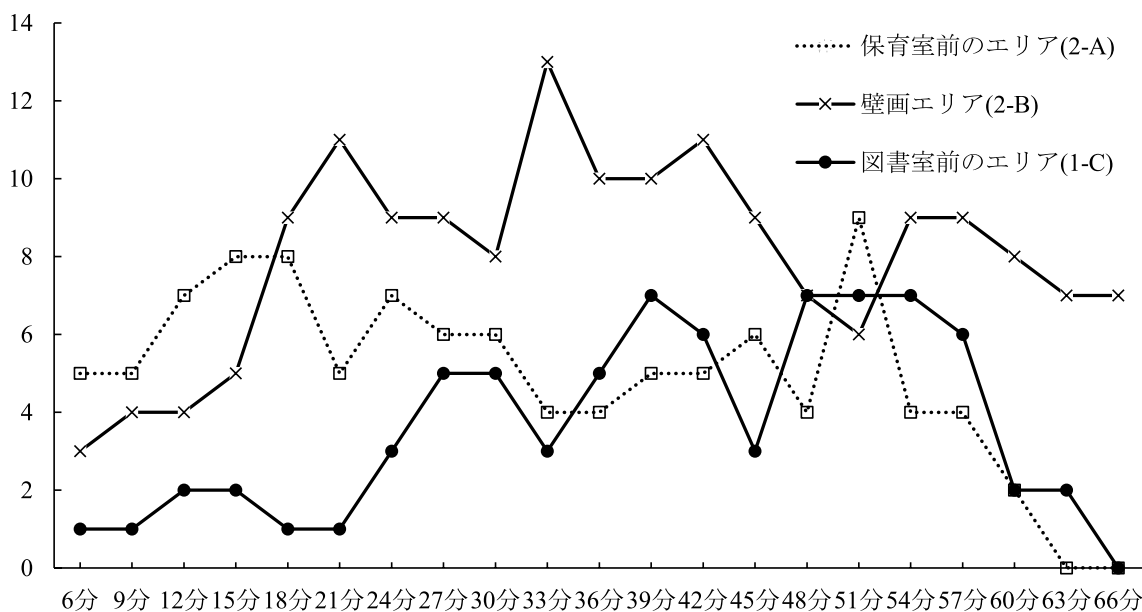


Figure 4 各定点観測時間における3つの描画活動エリアに位置する幼児の人数プロフィール

み、多くの幼児が存在する中での描画活動時における幼児の空間利用状況に関する探索的な検討を行った。2つの定点観測の結果から、本研究で設定された描画活動エリアにおいてどのように幼児が位置づけるかを明らかにすることができた。一方、本研究で観測対象としたエリアの枠組みに留まるのではなく、今後は、特に、研究Ⅰにおける色づくりエリアあるいは研究Ⅱにおける壁画エリアに関してエリアを分割した上での観測を行うことや幼児の行動内容の観測といったことも含めて検討することが求められる。定点観測の手法については、手良村（2005）の実施した5歳児の描画活動における観察手法を取り入れるなどしながら、より詳細な観測を進めていく必要もあるだろう。また、本研究は、保育実践における保育実践者の環境構成や声かけの工夫を研究者側に対して顕在化することが出来た。このことは、即興的であり実践的思考様式に基づく保育実践者の行動の一側面を捉えることに繋がり、研究目的を保育者の熟達化に設定する場合は、観測対象として検討を進めていくことも重要な視点になり得ると考えられる。なお、こうした今後の研究構想の視点が見いだされたのは、無藤（2013）の指摘する研究者が保育実践に入り込み、実践から学ぶ契機になったことに起因するものであり、改めて研究者が実践に入り込む必要性や重要性を可視化するものであったと考えられる。

本研究は、描画活動を基軸として定点観測を行ったものであった。しかし、本研究が対象とした描画活動からは、幼児が、描画活動をきっかけとして具体的なごっこ遊びや他の幼児や保育実践者の考えや行動を模倣する姿も見られた。また、色づくりという活動が、幼児の創造性に寄与することも示唆された。こうした知見を幼児教育という俯瞰的な視点から捉えるのであれば、保育実践者が、本研究の観測した保育実践を事後の発展的な活動にどのように関連させているのかを検討していくことも重要になる。

また、本研究は、保育実践者と研究者との連携による実践研究を積み重ねていく端緒という目的であったが、描画活動というものを中核としながらも研究者側に実践を捉えることに起因する多様な視座を与える上で有効なものになったと考えられる。それでは、今後より一層、保育実践者と研究者との連携による実践研究を進めていくためには、どのような視点が必要となるのだろうか。大野・中坪・杉村・七木田（2012）によれば、保育者が大学との連携支援による実践研究を経験することは、実践研究を難しいと感じる程度を低くし、実践研究をより面白いものと感じるようにすること、また面白いと感じる点が保育の観点の変化を体験することにあることを明らかにしている。こうした視点に立脚すれば、研究者は、本研究を通して保育実践者の保育の常識を打ち破る視点を提供し、その変化を体験できるような場をもたらすことも必要となるだろう。

本研究を基軸に考えるならば、例えば、杉本・成清（2007）を援用しつつ、本描画活動で活用された材料を美術の専門家の視点から検討し、教材としての新たな可能性を保育実践者に可視化させること等が考えられる。

今後は、保育実践者と研究者が、保育実践を共有し、保育実践者の保育の観点の変化をもたらす可能性を伴う事象を研究者が見出し、新しい視点を提供するとともに、連携して描画活動に関するリサーチクエストを創り上げることが求められる。また、幼児の描画意図や他の幼児との関わりを精緻化し、連携した保育実践による知見を汲み上げつつ、事前事後の活動を俯瞰的に捉えた体系的な幼児教育プログラムのあり方を構築していく必要もあるだろう。このような考察が、他でもない世界的に幼児教育への注目と重要性が叫ばれる時期に行われたことにより、今後の保育実践者と研究者の連携により真に保育現場を刺激する実践研究を進めていく一助になったと考えられる。

#### 謝辞

本研究で報告した実践活動において協力頂いた保育補助者及び実習生諸氏に対し、甚深の感謝の念を表します。

#### 付記

本研究は、平成28年度高知大学教育学部部門研究プロジェクト「絵の具遊び活動に関する実践的研究—学部教員と連携した幼児教育プログラムの開発—」の助成を受け行ったものの一部である。

#### 注

- 1) 当該の質問紙では、「造形活動を担当したことがあればその経験を、担当したことがなければ想定して答えてください」とある。そのため、調査対象者全員が実習の中で実際に造形活動を担当した上での回答というわけではない。そのため、結果の妥当性に不明瞭な部分が残る。
- 2) 当該の取り組みは、国立大学が法人化する以前に行われたものである。
- 3) 本研究で扱った保育実践の中での描画活動は、幼児が複数の絵の具を使って出来上がった色を活用して、その絵の具を自由に使って筆などで小屋やモニュメントあるいは大きな白い和紙に考えたことを描いたり色を塗ったりする活動であった。そのため、本研究においては、描画活動の範囲を広範に捉えている。また、保育実践者は、研究者との対話で「絵の具遊び活動」や「混色の経験」という表現も用いていた。
- 4) 観察期間の開始時間については、通常は自由遊びが、9時から開始されるものの、4歳児の年中組2クラスに所属する幼児全員が、保育室での活動を経て、保育室から揃って描画活動エリアに移動して全員座り始めるまで



- 時間を要したことに起因する。また、終了時間については、当該日に同一の附属学校の1つである中学校に所属する中学生が、家庭科の時間を活用して幼稚園を訪問し、幼児と異年齢交流する活動が10時15分以降設定されていたことに起因する。
- 5) 本論文の著者の1人でもあり、研究I実施に到る前に数度の研究者間での協議の推進や協力幼稚園との調整を行った。また、本研究の位置づくプロジェクト推進に必要な予算を獲得した代表者でもある。
  - 6) 本論文の第一著者であり、教育心理学及び教育工学を専門分野としている。
  - 7) 丸木小屋は、通常、ままごとやお店屋さんごっこ等に活用されている。
  - 8) 本研究の計画段階では、丸木小屋の外側及び内側は4側面あるため、それぞれ4つのエリアとして設定することを考えていた。しかし、実際の定点観測を想定し、事前に協力幼稚園で予備観測を行ったところ、丸木小屋の内側の4側面を観測することの難しさが懸念された。そのため、丸木小屋の外側及び内側の4側面は一律に外側あるいは内側として扱った。
  - 9) 白いモニュメントには穴があり、穴の中も観測対象であったが、危険性を鑑み、当日の保育実践者から幼児に対する説明の中で穴の中は色を塗るあるいは絵を描く活動の対象外であることが説明された。
  - 10) ブルーシート上に広げた大きな白い和紙(1-D)については、ブルーシートを2枚設置した上に白い和紙をそれぞれ3~4枚ほど設置した。また、幼児が描き終わると適宜、研究者が新しい和紙に取り換えを行った。なお、定点観測においては、分割せずに1つのエリアとして設定した。Figure 1における1-D内の□部分は、ブルーシートを示している。また、色づくりエリア(1-E)については、絵の具を混ぜし色づくりができる机を6つ設置した。なお、定点観測においては、分割せずに1つのエリアとして設定した。Figure 1における1-E内の□部分は、机を示している。
  - 11) 3名の研究者の専門は、日本画、西洋画、デザインと美術の中においても様々な専門性を持っている。なお、3名の研究者の中2名(日本画の専門家及び西洋画の専門家)は、2016年6月に当該幼稚園と連携し、4歳年中組の幼児を対象に遊戯室を利用して、2m×3mの大きな和紙に、筆やスポンジなどを使って幼児各自が考えたものを描く「ダイナミックな絵の具遊び体験」にも参画している。
  - 12) 実際には、保育補助者に該当する者1名、実習生2名も活動に参画していた。
  - 13) ○○先生の○○部分には、保育実践者の名前が本来は入るのだが、倫理的視点から実名記載を行わなかった。
  - 14) 実際の説明を行う保育実践者の発言中には、むろん幼児からの応答や発言もあるため、説明というよりは会話形式の説明と明記する必要があるかもしれない。
  - 15) 開始時間0分時点は、全員が色づくりエリア(1-E)に位置づいていた。そのため、活動開始3分後からを整理した。また、実際には色づくりエリアからの移動となるパターンが多かったため、移動中の児童は幅広く色づくりエリアに位置づくとして観測を行った。また、色づくりエリアにいるものの、色づくりを行わず、自分の好きな遊び(e.g., どんぐり集め)をしている幼児もみられ、実際の活動内容については今後精査する必要がある。
  - 16) 本研究で扱った保育実践の中での描画活動は、幼児が絵の具を混ぜて新しい色を作る活動より、絵の具を自由に使って筆などで各エリアに設置された大きさや配置の異なる白い和紙に考えたことを描いたり色を塗ったりする活動に主眼が置かれていたと考えられる。むろん、本研究においては、描画活動の範囲を広範に捉えている。
  - 17) 登園して身支度が終わった幼児が、順次希望に応じて描画活動に参加した。そのため、観察期間の開始時間については、通常の子遊び開始の9時よりも早く設定されている。一方、徐々に幼児が活動を終え手や足を洗う中で、1つのエリアにしか幼児がいなくなった時点を観測終了時間とした。
  - 18) 年少専用プール以外にも、協力幼稚園には、7×11メートルの大きなプールも存在する。
  - 19) 保育室前のエリア及び図書室前のエリアには、ブルーシートを広げ、ブルーシートの上に白い和紙を設置した。Figure 3における□部分は、おおよその和紙を示している。なお、3つのエリアの白い和紙は、幼児が描き終わると適宜、研究者が新しい和紙に取り換えを行った。
  - 20) 研究Iと同一の5名である。
  - 21) 実際には、保育補助者2名も活動に参画していた。
  - 22) 開始時間0分時点は、最初の1名が保育室前のエリアで保育者と1対1で会話をしている場面であったため、活動開始3分以降を整理することとした。しかし、多くの幼児が、一斉に3分前後の時点で各エリアでの描画活動を行おうとしたため、幼児の活動支援を第1義にした結果、3分時点の定点観測が出来なかった。そのため、活動開始6分以降の結果を記載している。なお、実際には、各エリアにいるものの、絵を描くのではなく、色づくりや周りの幼児と会話をしている幼児もみられ、実際の活動内容については今後精査する必要がある。また、当該の描画活動は、各幼児の希望に基づくものであるため、途中参加や途中で抜けていく幼児もいるため、観測対象の全人数も異なるものとなっている。
  - 23) 当該の幼児には、他の幼児と協同しているという認識はないとも考えられる。

引用文献

東山 明・東山直美 (1999) . 子どもの絵は何を語るか : 発達科学の視点から 日本放送出版協会

花篤 實・岡田愨吾 (2009) . 新造形表現 : 理論実践編 三見書房

木原久美子 (2003) . 大学の研究者が保育者と協働することの意義 帝京大学文学部紀要教育学, 28, 83-104.

松井愛奈・無藤 隆・門山 睦 (2001) . 幼児の仲間との相互作用のきっかけ : 幼稚園における自由遊び場面の検討 発達心理学研究, 12, 195-205.

文部科学省 (2008) . 幼稚園教育要領 フレーベル館

森 俊夫・齋藤益美 (2013) . 幼児の絵の色彩特徴と形態特徴の評価 岐阜女子大学紀要, 42, 55-61.

無藤 隆 (2001) . 知的好奇心を育む保育 : 学びの3つのモード論 フレーベル館

無藤 隆・岩立京子・倉持清美・西坂小百合・森下葉子・青木聡子 (2004) . 保育者研修において附属幼稚園が果たす役割—幼児教育未来研究会を通して— お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 1, 1-11.

無藤 隆・森下葉子・齋藤久美子・高濱裕子 (2007) . 保育者の研修に対して大学と附属が寄与するあり方をめぐって—幼児教育未来研究会の実践から考える— お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, 35-44.

無藤 隆 (2013) . 実践現場における発達研究の役割 : 実践的研究者と研究的実践者を目指して 発達心理学研究, 24, 407-416.

大野 歩・中坪史典・杉村伸一郎・七木田敦 (2012) . 保育者の専門性向上に対する大学の支援の在り方に関する研究—保育者との共同による実践研究事業を事例として— 幼年教育研究年報, 34, 19-26.

佐川早季子 (2016) . 他児との相互作用を考慮した幼児の造形表現プロセスの検討—4歳児の制作におけるモノを他者に「見せる」行為の機能に着目して— 発達研究, 30, 83-94.

齋藤正典・小谷宜路・志村聡子・内村朋子・林伸二郎 (2001) . 幼稚園教師と観察者の間に見られる事例解釈の相違点についての検討—教師と研究者の共同研究のあり方を考える— 埼玉大学教育実践研究指導センター紀要, 14, 37-51.

島田由紀子 (2015) . 保育系学生の実習における造形活動 和洋女子大学紀要, 55, 109-117.

杉原 徹・小島一久 (2010) . 短期大学と附属幼稚園との連携—22年度の取り組み— 高知学園短期大学紀要, 41, 55-64.

杉本亜鈴・成清美朝 (2007) . 幼児の造形表現における素

材・材料の研究—水性絵の具による絵画と版画の新たな題材展開について— 東京成徳短期大学紀要, 40, 45-58.

手良村昭子 (2005) . 関係活動モデルにおける描画活動の観察とその分析 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要, 2, 51-57.

若山育代 (2008) . どのような言葉かけが幼児の発達を支援するか?—見立て絵にみられる4歳児と5歳児の想像的・情緒的表現に着目して— 美術教育学, 29, 631-644.

若山育代 (2012) . 見立て描画遊び研究の展望—見立てのイメージの「創造」と導入の在り方に着目して— 美術教育学, 33, 437-444.

山田真世 (2014) . 幼児期の描画発達研究の動向と展望 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要, 8, 123-133.

Appendix

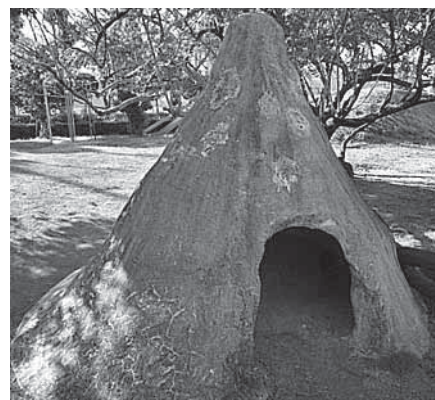
Appendix 1 7色の絵の具



Appendix 2 丸木小屋



Appendix 3 白いモニュメント



Appendix 4 色づくりエリア



Appendix 5 描画活動実践に向けた保育実践者の工夫



Appendix 6 描画活動時の工夫と他の幼児の模倣



Appendix 7 プールを活用した壁画エリア

